

### 若年者における統制の位置と自尊感情の関係について

わが国の子どもたちは、各種国際調査による比較の分析をとおして、自尊感情及び自己肯定感の低さが顕著であるということが分かった。グローバル化が進むこれからの社会で活躍する日本人を育成するために、自分の良さに自信をもって行動ができるよう、自尊感情や自己肯定感を高めていく教育を推進していくことが課題とされている。本研究では、社会心理学の知見から実際に若年層の統制の位置と自尊感情を調査し、彼らが特にどのようにして友人関係を築こうとしていくのかを検討する。

統制の位置 (locus of control) の先行研究では、Rosenberg(1979)が挙げられる。内的統制傾向の高い者は、自分の行動の結果を基本的に自身の努力や能力によってコントロールできると考える者を指す。一方外的統制傾向が高い者は、自分の行動の結果を自身ではコントロールできないと考える者をいう。先行研究では内的統制傾向の高い者に対する評価が高い。例えば次良丸(1973)は「他者から好感をもたれる」などと述べている。

加えて、「自尊感情の高さ」も内的統制傾向の高さに関係していると報告されている。疑問は、先行研究のほとんどが、内的統制傾向の強い者は積極的な評価がなされていることである。しかし、内的統制傾向の強い者が、周囲の者から友人関係を結びたいという対人魅力につながるのかということは検証する余地がある。よって以下の2点を本研究の仮説とする。

- ① 多くの先行研究では、内的統制傾向の強い者は自尊感情も高いという正の相関が見られるが、本研究でも同じ結論が得られる。
- ② 高校生が友人関係を結ぼうとする際、内的統制傾向の極めて強い人とは本当に友人になりたいと周囲の者は考えない。

本研究の調査では、高校3年生113名を対象に質問紙による質問を行った。

質問1では、山本・松井・山成(1982)によるRosenbergの邦訳版の「自尊感情」を測定する尺度を使用し、被験自身の自尊感情を測定した。

質問2では、鎌原・樋口・清水(1982)によるlocus of control尺度を用い、18項目の質問に対して被験者の統制の位置を測定した。

質問3では、質問2と同様の尺度を、調査用に3つのパターンの刺激人物の回答として作成したものに対して被験者から友人としての魅力度として回答を得た。これにより、被験者は内的統制傾向が高い刺激人物ほど、積極的に友人関係を結ぼうとするのかを測定した。

「自尊感情得点」と「内的統制傾向得点」の相関係数を算出したところ、.437( $p < .01$ )が得られ、有意な中程度の正の相関があることが判明した。これにより、本研究でも先述の仮説②が支持された。

次に仮説①の検討のため、刺激人物の内的統制傾向に対する従属群として、質問1と質問2を加味し、3(内的統制傾向得点：高・中・低)×2(自尊心得点：高・低)の3要因分散分析を行った。その結果、「内的統制傾向得点—低」のみが $p < .01$ という有意差が認められた。ほかの「内的統制傾向得点—高」及び「内的統制傾向得点—中」について、各々主効果はないという結果となった。すなわち、どのような被験者が質問3に回答しても、友人になりたいと思われる相手は、「内的統制傾向得点—低」 < 「内的統制傾向得点—高」 < 「内的統制傾向得点—中」の順に高くなるということになり、仮説①は棄却された。

Rosenberg(1979)が報告した「内的統制傾向の者は高い自尊感情と関連している」という点では、本研究の被験者の分析を鑑みると「内的統制傾向一高」の刺激人物には有意な主効果が見られなかった。被験者が接している他の生徒の中に、「内的統制傾向一高」のモデルがないのではないかと考えられる。一方「内的統制傾向一低」の刺激人物に対しては主効果に有意な結果が現れていた。つまり、被験者の周囲に同じような生徒が存在し、そのイメージがつかみやすいことから、「友人としての魅力度」が、他の2つに比べて有意に低くなったと考えられる。加えて、被験者自身が質問2において、自らが同じような回答をしており、被験者自身に対する自尊感情あるいは自己肯定感が低いことによって、このような結果に通じたとも考えることができる。

自尊感情は自己概念に対する評価的側面であり、その評価によりはぐくまれるものであるというのが一般的な考え方である。そしてはぐくまれた自尊感情は、新たな自己の確立や自己評価に影響を与えるものだと考えられる。子どもに自尊感情をはぐくむために、アクティビティによるきっかけづくりから始めるアプローチもあるが、根本的なところは教職員、学級、学校の在り方に左右されるところが大きい。

子どもの自尊感情をはぐくむためには、教職員、学級、学校が受容的で共感的なものであり、子ども一人一人の存在を肯定的にとらえていけるような環境であることに加えて、保護者や地域と協働する環境を創造していくことが求められる。

以上